2022 年制定　コンクリート標準示方書[設計編]
正誤表

2024/1/11

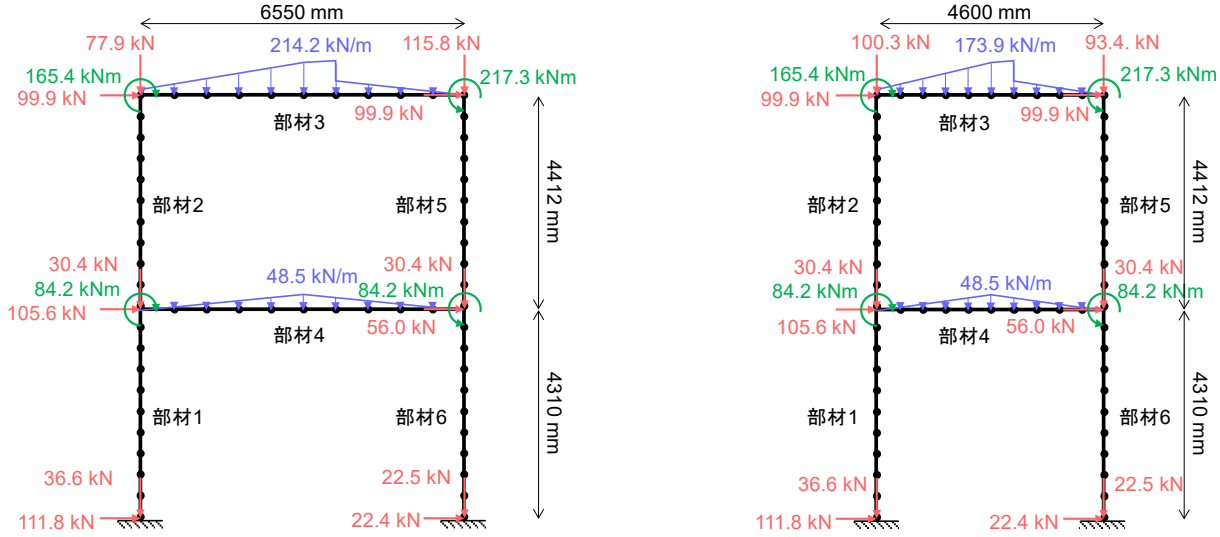
<table>
<tr><th>ページ</th><th>行</th><th>誤</th><th>正</th></tr>
<tr><td>169</td><td>23</td><td>亜鉛めっき鉄筋を用いるコンクリート構造物の設計・施工指針（案）</td><td>亜鉛めっき鉄筋を用いるコンクリート構造物の設計・施工指針（案）（コンクリートライブラリー154）</td></tr>
<tr><td>347</td><td>解説表 5.2.2</td><td>
<table>
<tr><th rowspan="3">セメントの種類</th><th colspan="6">$Q(t)=Q_\infty\left(1-e^{-r(t-t_0)S}\right)$</th></tr>
<tr><th colspan="2">$Q_\infty=a+b\times T_a$ 注1)</th><th colspan="2">$r=g+h\times T_a$ 注1)</th><th colspan="2">$t_0=a\times\exp(-b\times T_a)$</th></tr>
<tr><th>a</th><th>b</th><th>g</th><th>h</th><th>a</th><th>b</th></tr>
<tr><td>高炉セメント C 種 注3)</td><td>21.6+0.0586×C 注2)</td><td>-0.0696+0.00038×C</td><td>-0.948+0.00219×C</td><td>0.0817+0.00004×C</td><td>0.629-000005×C</td><td>0.054-000003×C</td></tr>
</table>
</td><td>
<table>
<tr><th rowspan="3">セメントの種類</th><th colspan="6">$Q(t)=Q_\infty\left(1-e^{-r(t-t_0)S}\right)$</th></tr>
<tr><th colspan="2">$Q_\infty=a+b\times T_a$ 注1)</th><th colspan="2">$r=g+h\times T_a$ 注1)</th><th colspan="2">$t_0=a\times\exp(-b\times T_a)$</th></tr>
<tr><th>a</th><th>b</th><th>g</th><th>h</th><th>a</th><th>b</th></tr>
<tr><td>高炉セメント C 種 注3)</td><td>21.6+0.0586×C 注2)</td><td>-0.0696+0.00038×C</td><td>-0.948+0.00219×C</td><td>0.0817+0.00004×C</td><td>0.629-0.00005×C</td><td>0.054-0.00003×C</td></tr>
</table>
※下段，右側の2つの式に漏れていた小数点を追記
</td></tr>
<tr><td>368</td><td>6</td><td>(i)引張鉄筋の基本定着長 ld は，式(2.5.1)による算定値とする．ただし，標準フックを設ける場合には，この算定値から 10φだけ減じることができる．</td><td>(i)引張鉄筋の基本定着長 ld は，式(2.5.1)による算定値とする．ただし，標準フックを設ける場合や特性が標準フックと同等であると確認された機械式定着とする場合には，この算定値から 10φだけ減じることができる．</td></tr>
<tr><td>368</td><td>18</td><td>（3） 定着部が曲がった鉄筋の定着長のとり方は，以下のとおりとする(図 2.5.2 参照)．
(i)引張鉄筋の基本定着長 ld は，式(2.5.1)による算定値とする．ただし，標準フックを設ける場合や特性が標準フックと同等であると確認された機械式定着とする場合には，この算定値から 10φだけ減じることができる．</td><td>（3） 定着部が曲がった鉄筋の定着長のとり方は，以下のとおりとする(図 2.5.2 参照)．
(i) 曲げ内半径が鉄筋直径の 10 倍以上の場合は，折り曲げた部分も含み，鉄筋の全長を有効とする．</td></tr>
</table>

		(ii)圧縮鉄筋の基本定着長 ld は，式(2.5.1)による算定値の 0.8 倍とする．ただし，標準フックを設ける場合でも，これ以上減じてはならない． (iii)定着を行う鉄筋が，コンクリートの打込みの際に，打込み終了面から 300 mm の深さより上方の位置で，鉄筋の下側におけるコンクリートの打込み高さが 300mm 以上ある場合，かつ水平から 45°　以内の角度で配置されている場合は，引張鉄筋または圧縮鉄筋の基本定着長は，(i)または(ii)で算定される値の 1.3 倍とする．	(ii)曲げ内半径が鉄筋直径の 10 倍未満の場合は，折り曲げてから鉄筋直径の 10 倍以上まっすぐに延ばしたときに限り，直線部分の延長と折曲げ後の直線部分の延長との交点までを定着長として有効とする．

2022 年制定　コンクリート標準示方書【設計編】
正　誤　表

	頁	行，図・表番号	誤	正
付属資料	718	下から 8 行目	～式(3.1.6)，式(3.1.10)～式(3.1.13)～	～式(3.1.10)～式(3.1.17)～
付属資料	719	図 2.2.1		

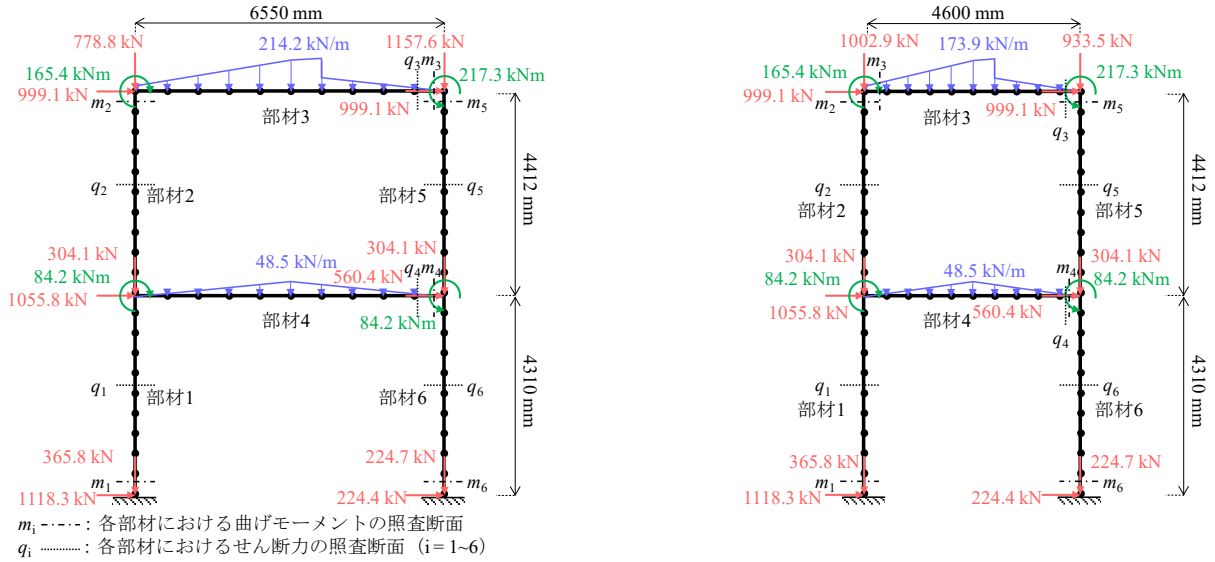
（誤）



(a)　フェイズ1　　(b)　フェイズ2

図2. 2. 1　対策の要否判定に際して想定する構造系における骨組図および荷重図

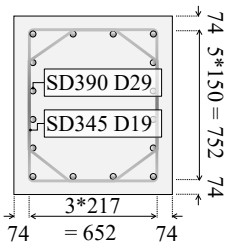
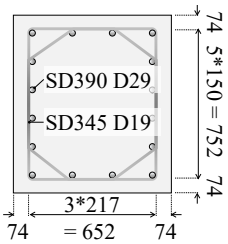
（正）



m_i -·-·-：各部材における曲げモーメントの照査断面
q_i ……：各部材におけるせん断力の照査断面（i＝1~6）

(a)　フェイズ1　　(b)　フェイズ2

図2. 2. 1　対策の要否判定に際して想定する構造系における骨組図および荷重図

	頁	行，図・表番号	誤	正
付属資料	719	図 2.2.2(f)		 単位：mm

	頁	行，図・表番号	誤	正
付属資料	720	上から3行目	～［設計編］に基づき～	～標準4編2章「ひび割れによる外観に対する照査」に基づき～
付属資料	720	上から5行目	～［設計編］に記されている～	～標準2編3章「耐久性に関する照査」に記されている～
付属資料	720	下から8行目	～余裕率の相関図を示す．フェイズ1から～	～余裕率の相関図を示す．損傷レベル3を許容する部材4については，損傷レベル2に対する安全性に関する余裕率が負数を示した場合，0をプロットしているが，**図2.4.1**には負数のみを表示範囲に設定しているため，部材4におけるプロットは表示されていない．フェイズ1から～
付属資料	720	下から7行目	～構造系の変化に伴い安全性に関する余裕率が減少する傾向を示し，構造系の変化後も安全性に関する余裕率は負値を示した．	～構造系の変化に伴い安全性に関する余裕率が部材1および部材2では減少する傾向を，部材3，部材5，部材6では増加する傾向を示し，構造系の変化後も安全性に関する余裕率は負値を示した．
付属資料	720	下から4行目	～部材断面に変化はないため一定の値を示している．	～部材断面に変化はないため概ね一定の値を示している．
付属資料	721	表2.4.1		

（誤）

表2.4.1　設計限界値および設計応答値と劣化が生起する年数および設計耐用年数の算定結果

フェイズ1	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材1	1810.9	340.1	641.3	4944.5	1877.3	2656.1	50.0	80242.1	259.3
部材2	841.4	337.2	511.4	1790.9	1878.6	2657.1	50.0	135191.0	259.8
部材3	1065.5	684.3	880.2	2323.4	1030.0	1177.6	50.0	186427.7	819.8
部材4	1432.3	257.8	644.6	4264.9	669.0	742.6	50.0	80622.5	819.8
部材5	1156.8	361.5	753.2	3085.5	1142.1	1791.8	50.0	80846.0	308.0
部材6	1803.5	364.6	1239.3	4176.1	1142.1	1791.8	50.0	65034.8	308.0

フェイズ2	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材1	1806.6	340.1	641.3	4847.9	1877.3	2656.1	50.0	80242.1	259.3
部材2	938.4	337.2	511.4	2823.6	1878.6	2657.1	50.0	135191.0	259.8
部材3	1476.2	843.2	880.2	2989.0	1030.0	1177.6	50.0	186427.7	819.8
部材4	1873.9	297.5	644.6	4190.9	669.0	742.6	50.0	80622.5	819.8
部材5	1057.3	361.5	753.2	3105.2	1142.1	1791.8	50.0	80846.0	308.0
部材6	1805.2	364.6	1239.3	4820.9	1142.1	1791.8	50.0	65034.8	308.0

*Q：作用せん断力，V_{bf}：ビーム機構の耐力，V_u：終局せん断耐力，M：作用モーメント，M_y：鉄筋降伏時の耐力モーメント，M_u：終局モーメント

（正）

表2.4.1　設計限界値および設計応答値と劣化が生起する年数および設計耐用年数の算定結果

フェイズ1	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材1	1793.7	340.1	641.3	5715.5	1877.3	2656.1	50.0	80242.1	259.3
部材2	908.6	337.2	511.4	3568.9	1878.6	2657.1	50.0	108152.8	259.8
部材3	1434.4	684.3	880.2	3819.9	1030.0	1177.6	50.0	149142.1	819.8
部材4	841.7	257.8	644.6	2543.9	669.0	742.6	50.0	112871.5	819.8
部材5	1089.6	361.5	753.2	4037.2	1142.1	1791.8	50.0	80846.0	308.0
部材6	1820.7	364.6	1239.3	5742.0	1142.1	1791.8	50.0	61783.1	308.0

フェイズ2	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材1	1806.6	340.1	641.3	4847.9	1877.3	2656.1	50.0	80242.1	259.3
部材2	938.4	337.2	511.4	2823.6	1878.6	2657.1	50.0	135191.0	259.8
部材3	1476.2	843.2	880.2	2989.0	1030.0	1177.6	50.0	186427.7	819.8
部材4	1873.9	297.5	644.6	4190.9	669.0	742.6	50.0	80622.5	819.8
部材5	1057.3	361.5	753.2	3105.2	1142.1	1791.8	50.0	80846.0	308.0
部材6	1805.2	364.6	1239.3	4820.9	1142.1	1791.8	50.0	65034.8	308.0

*Q：作用せん断力，V_{bf}：ビーム機構の耐力，V_u：終局せん断耐力，M：作用モーメント，M_y：鉄筋降伏時の耐力モーメント，M_u：終局モーメント

	頁	行，図・表番号
付属資料	721	図 2.4.1

（誤）

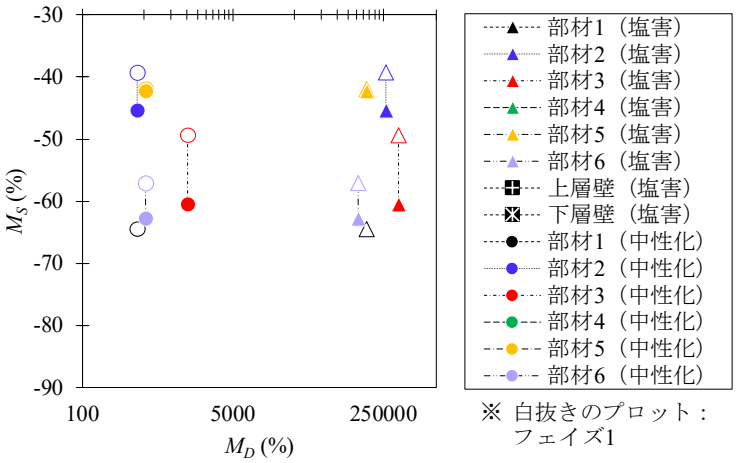


図2.4.1　フェイズ1～フェイズ2における部材系の安全性に関する余裕率と耐久性に関する余裕率の相関図

（正）

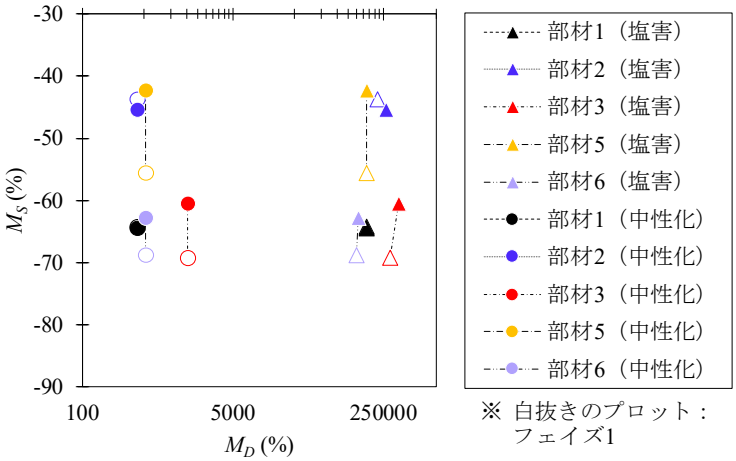
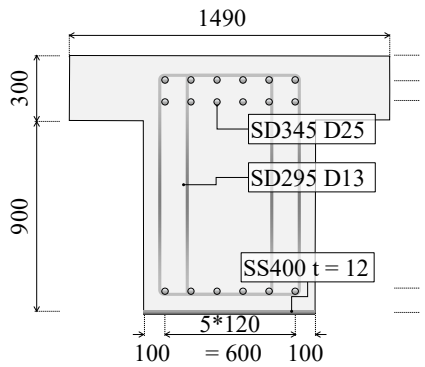
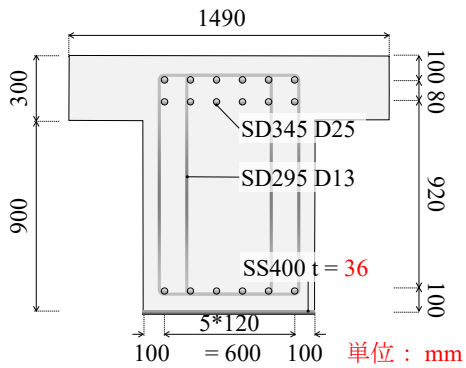
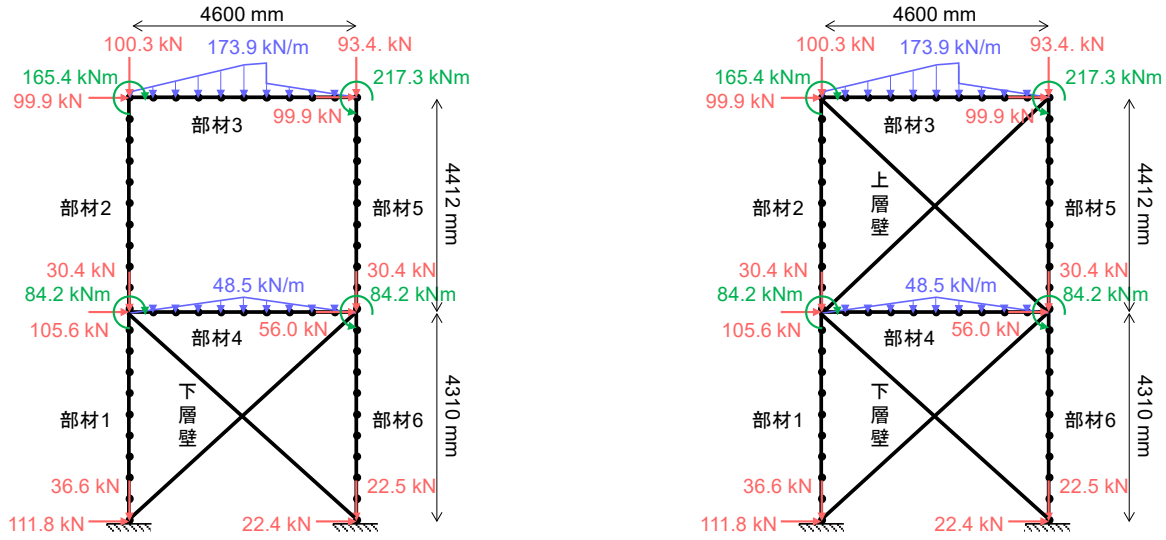


図2.4.1　フェイズ1～フェイズ2における部材系の安全性に関する余裕率と耐久性に関する余裕率の相関図

	頁	行，図・表番号	誤	正
付属資料	722	図 3.1.2(c)		
付属資料	723	上から1行目	～板厚が 12 mm の SS400 材～	～板厚が 36 mm の SS400 材～
付属資料	724	下から6行目	～（図 4.1.1(b)），～	～（図 4.1.2(b)），～

	頁	行，図・表番号
付属資料	724	図 4.1.1

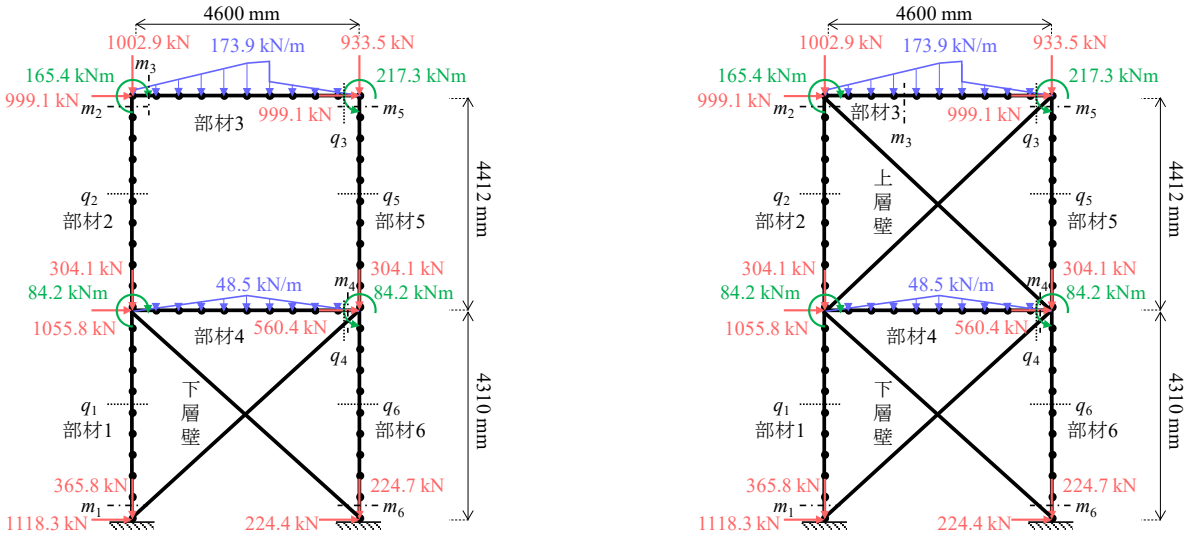
（誤）



(a)　フェイズ3，フェイズ4　　(b)　フェイズ 5

図4.1.1　補強後の構造系における骨組図および荷重図

（正）



(a)　フェイズ3，フェイズ4　　(b)　フェイズ 5

図4.1.1　補強後の構造系における骨組図および荷重図

	頁	行，図・表番号
付属資料	725	表 4.1.2

（誤）

表 4.1.2　設計限界値および設計応答値と劣化が生起する年数および設計耐用年数の算定結果

フェイズ 3	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材 1	276.9	340.1	641.3	659.6	1877.3	2656.1	50.0	180061.1	259.3
部材 2	908.7	391.6	2271.2	2211.1	3013.2	4290.1	50.0	265973.4	840.4
部材 3	1046.7	843.2	880.2	1572.0	1030.0	1177.6	50.0	239951.0	819.9
部材 4	522.4	297.5	644.6	995.9	669.0	742.6	50.0	239330.3	820.9
部材 5	1089.5	361.5	753.2	2274.9	1142.1	1791.8	50.0	98460.6	308.1
部材 6	272.8	364.6	1239.3	764.4	1142.1	1791.8	50.0	166756.7	308.1
下層壁	272.8	1037.0	1395.3	—	—	—	50.0	4595.4	720.6

フェイズ 4-1	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材 1	276.9	340.1	641.3	659.6	1877.3	2656.1	50.0	180061.1	259.3
部材 2	908.7	391.6	2271.2	2211.1	3013.2	4290.1	50.0	265973.4	840.4
部材 3	1046.7	937.2	1158.3	1572.0	4348.9	4678.6	50.0	555306.9	1084.9
部材 4	522.4	297.5	644.6	995.9	669.0	742.6	50.0	335062.4	948.0
部材 5	1089.5	451.5	2647.1	2274.9	2666.3	3871.0	50.0	381263.5	926.2
部材 6	272.8	364.6	1239.3	764.4	1142.1	1791.8	50.0	166756.7	308.1
下層壁	272.8	1037.0	1395.3	764.4	—	—	50.0	4595.4	720.6

フェイズ 4-2	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材 1	310.7	340.1	641.3	886.9	1877.3	2656.1	50.0	80242.1	259.3
部材 2	66.2	337.2	511.4	214.9	1878.6	2657.1	50.0	135191.0	259.8
部材 3	327.2	843.2	880.2	419.4	1030.0	1177.6	50.0	186427.7	819.8
部材 4	310.3	297.5	644.6	599.0	669.0	742.6	50.0	80622.5	819.8
部材 5	153.1	361.5	753.2	432.6	1142.1	1791.8	50.0	80846.0	308.0
部材 6	344.1	364.6	1239.3	938.9	1142.1	1791.8	50.0	65034.8	308.0
上層壁	153.1	1043.5	1404.0	432.6	—	—	50.0	8069.2	721.0
下層壁	344.1	1037.0	1395.3	938.9	—	—	50.0	4595.4	721.0

*Q：作用せん断力，V_{bf}：ビーム機構の耐力，V_u：終局せん断耐力，M：作用モーメント，M_y：鉄筋降伏時の耐力モーメント，M_u：終局モーメント

（正）

表 4.1.2　設計限界値および設計応答値と劣化が生起する年数および設計耐用年数の算定結果

フェイズ 3	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材 1	91.8	340.1	641.3	643.2	1877.3	2656.1	50.0	180061.1	259.3
部材 2	952.5	391.6	2271.2	2291.7	3013.2	4290.1	50.0	265973.4	840.4
部材 3	1234.5	843.2	880.2	2457.1	1030.0	1177.6	50.0	215955.9	819.9
部材 4	728.1	297.5	644.6	1560.4	669.0	742.6	50.0	215397.3	820.9
部材 5	1044.6	361.5	753.2	2525.6	1142.1	1791.8	50.0	98460.6	308.1
部材 6	109.7	364.6	1239.3	663.4	1142.1	1791.8	50.0	166756.7	308.1
下層壁	109.7	—	1395.3	—	—	—	50.0	4595.4	720.6

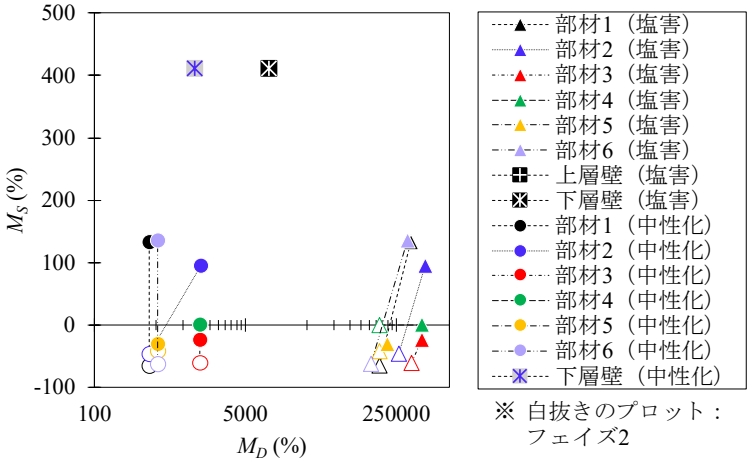
フェイズ 4	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材 1	91.8	340.1	641.3	643.2	1877.3	2656.1	50.0	180061.1	259.3
部材 2	952.5	391.6	2271.2	2291.7	3013.2	4290.1	50.0	265973.4	840.4
部材 3	1234.5	968.8	1245.8	2457.1	10852.0	10497.6	50.0	777429.7	1724.8
部材 4	728.1	297.5	644.6	1560.4	669.0	742.6	50.0	215397.3	820.9
部材 5	1044.6	451.5	2647.1	2525.6	2666.3	3871.0	50.0	381263.5	926.2
部材 6	109.7	364.6	1239.3	663.4	1142.1	1791.8	50.0	166756.7	308.1
下層壁	109.7	—	1395.3	—	—	—	50.0	4595.4	720.6

フェイズ 5	Q	V_{bf} Lv.1	V_u Lv.2	M	M_y Lv.1	M_u Lv.2	耐用年数	塩害	中性化
部材名	S_d (kN)	R_d (kN)	R_d (kN)	S_d (kNm)	R_d (kNm)	R_d (kNm)	T_S (年)	T_R (年)	T_R (年)
部材 1	310.7	340.1	641.3	886.9	1877.3	2656.1	50.0	168453.0	259.3
部材 2	66.2	337.2	511.4	214.9	1878.6	2657.1	50.0	189267.5	259.8
部材 3	327.2	843.2	880.2	419.4	1030.0	1177.6	50.0	425488.5	819.8
部材 4	310.3	297.5	644.6	599.0	669.0	742.6	50.0	313853.3	819.8
部材 5	153.1	361.5	753.2	432.6	1142.1	1791.8	50.0	195816.9	308.0
部材 6	344.1	364.6	1239.3	938.9	1142.1	1791.8	50.0	153907.1	308.0
上層壁	153.1	—	1404.0	—	—	—	50.0	8069.2	721.0
下層壁	344.1	—	1395.3	—	—	—	50.0	4595.4	721.0

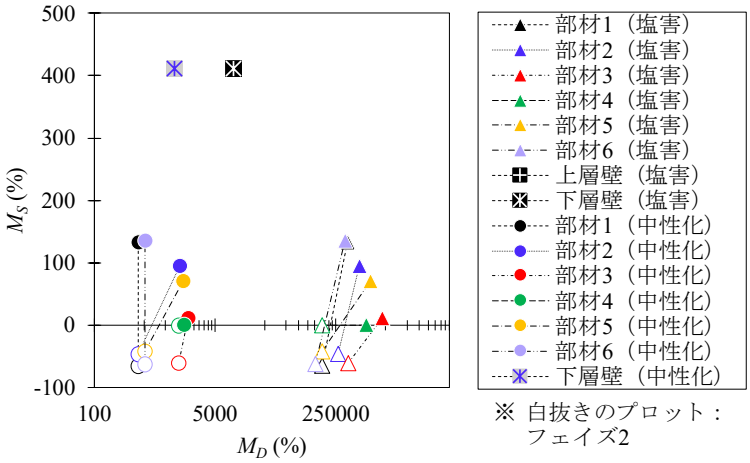
*Q：作用せん断力，V_{bf}：ビーム機構の耐力，V_u：終局せん断耐力，M：作用モーメント，M_y：鉄筋降伏時の耐力モーメント，M_u：終局モーメント

	頁	行，図・表番号	誤	正
付属資料	725	上から4行目	～特に部材6では，中性化に対する余裕率が増加し，～	～特に部材6では，塩害に対する余裕率が増加し，～
付属資料	725	上から6行目	～補強に伴う断面厚の増加に起因して，部材2，部材5，部材6において～	～補強に伴う断面厚の増加に起因して，部材2，部材3，部材5において～
付属資料	725	上から8行目	～余裕率に変化が見られないことが確認できる．	～余裕率に大きな変化が見られないことが確認できる．
付属資料	726	図4.1.2		

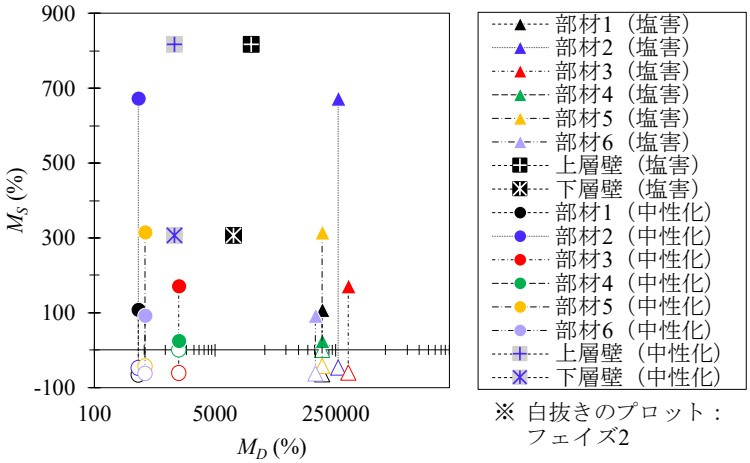
（誤）



(a)　フェイズ2～フェイズ3



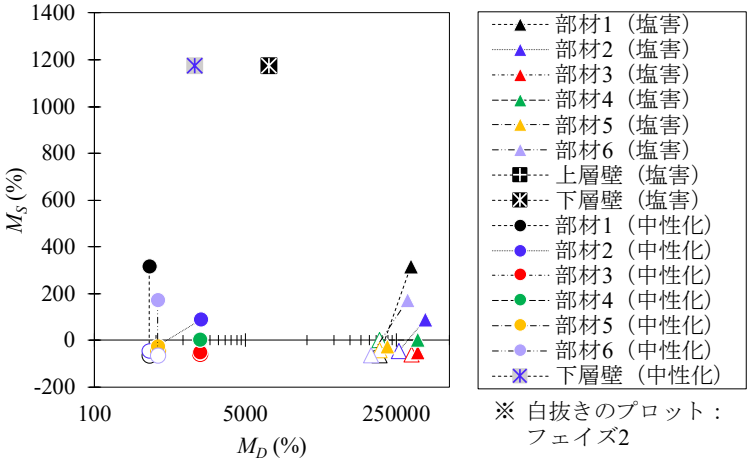
(b)　フェイズ2～フェイズ4



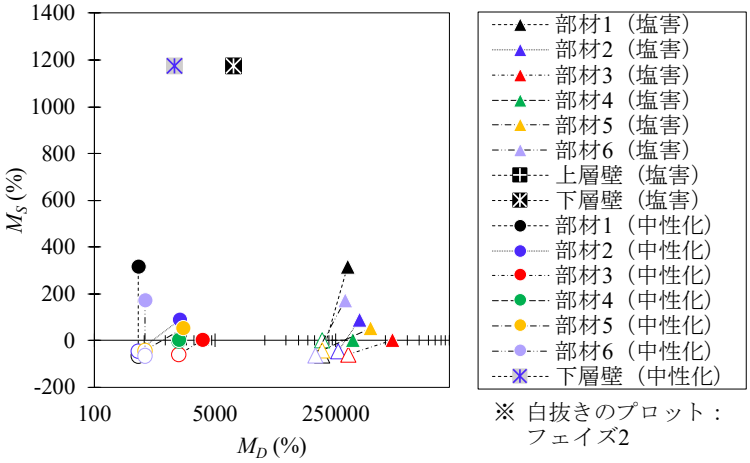
(c)　フェイズ2～フェイズ5

図4.1.2　補強後の各フェイズにおける部材系の安全性に関する余裕率と耐久性に関する余裕率の相関図

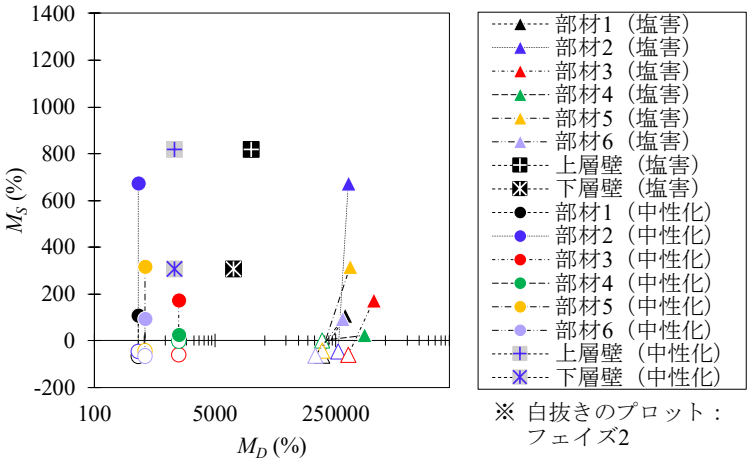
（正）



(a)　フェイズ2～フェイズ3



(b)　フェイズ2～フェイズ4



(c)　フェイズ2～フェイズ5

図4.1.2　補強後の各フェイズにおける部材系の安全性に関する余裕率と耐久性に関する余裕率の相関図

	頁	行，図・表番号
付属資料	727	図 4.4.1

（誤）

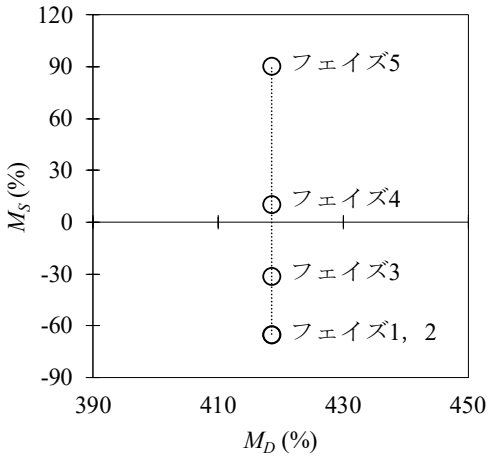


図 4.4.1 中層はりを除く構造系の余裕率の相関図

（正）

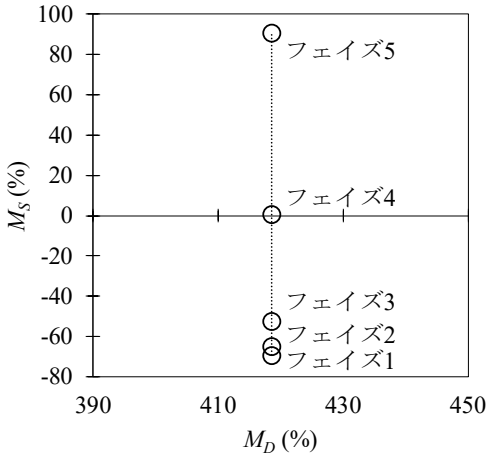


図 4.4.1 中層はりを除く構造系の余裕率の相関図